中エジプトの動物墓地からみる聖獣信仰の様相について

清水麻里奈　　西洋史学分野・専門 博士前期課程２年

調査の目的　本プロジェクトでは、古代エジプト宗教である聖獣信仰について、中エジプトの動物墓地に焦点を当てて考察する。

前７世紀から後４世紀の約１千年の間、何千万体という夥しい数の動物ミイラがエジプト全土に散在する動物墓地へと埋納された。聖獣信仰がこの期に隆盛をみせたことについて、王権主導の公的祭儀とみなされてきた学史がある（Kessler 1989）。しかし、エジプト全土で行われていた動物の飼育とミイラ化、さらには祈願者の巡礼など、数多くの聖獣信仰を通じて行われた活動を考えると、公の側面のみならず、私の側面で再検討する必要が生じる。つまり、民衆という視座から聖獣信仰の様相を考えなければならないのである。

そこで、本プロジェクトでは「地方」である中エジプトの動物墓地における民衆による信仰の様相について、とりわけ墓地から出土した考古資料の価値に差があることに着目し、聖獣崇拝に携わった経済活動を考究する。

調査の概要　調査期間：2019年12月16日～2020年１月31日（日本発：2019年12月15日、日本着：2020年２月１日）

調査Ⅰ：アコリス（上エジプト第14ノモス、現：テヘナ・エル・ジェベル）、アコリス調査発掘隊に参加し、神殿内につくられた動物ミイラ奉納所の調査を行った。調査Ⅱ：イビオタフェイオン（上エジプト第16ノモス、現：トゥナ・エル・ジェベル）、エジプト考古局の Dr. ムハンマド・アフバッラーと共に探訪。「トキとヒヒの動物墓地」と、通常は入場不可である「動物ミイラづくりの場」に訪れ、信仰に関連する遺構・遺物の調査を行った。

調査結果　調査Ⅰでは、動物ミイラ奉納所は、動物墓地ではなくワニを奉納するための奉納所である蓋然性が高いことを考究した。また、この神殿施設に動物を納める例は管見によれば唯一の史料であり稀有な例であるため、今後さらなる調査が期待される。調査Ⅱでは、動物ミイラから読み取ることのできる生産活動、とりわけミイラ化の差異・棺（石棺、木棺、土器棺）・副葬品の有無という点から、同一の機能を持つ遺物において材質が異なるのみならず多様な形態を有することを確認した。また、この背景には、聖獣信仰の興隆のために信仰に関連する一連の考古遺物の生産・消費活動が向上したとする可能性を見出した。

考察と課題　今回の調査では、中エジプトの動物墓地を探訪し、信仰に関連する考古遺物にはその価値に差があることを解いた。聖獣信仰の興隆期において、これらの遺物や物品の生産・流通と巡礼者群の蝟集で消費活動が活発化したことを考慮するならば、信仰に関連する一連の考古遺物の生産活動が向上したことが推測される。たとえば、棺について言及するならば、土器棺の場合にはマールクレイか在地産かという粘土、木棺材ではその樹種、石棺材でもその石材産地を吟味しなければならないが、在地産についてはその生産体制が組まれていたこと、交易を前提とする原素材や完成品については、交易可能な組織体に連なっていたことが推測される。

なお、本プロジェクトは、修士論文執筆のために行われる予定であったが、エジプト警察庁からの発掘許可が降りなかったという母体となる発掘調査団の調査遅延を受けて、博士論文執筆のための調査となった。また、予定していた全ての遺跡への探訪は叶わなかった。しかし、本プロジェクトの調査結果は今後取り組む申請者の学位論文の根幹をなす貴重な調査結果となりうるだろう。

参考文献

Kessler, D. (1989) *Die Heiligen Tiere und Der Köning, I.*, Wiesbaden: Harrassowitz.